

難波西鶴と

海の道

【92】

森田 雅也

前回は安芸(広島)の宮島の話でした。広島は瀬戸内海航路の要であるとともに西国大名に対する幕府のとりででした。したがって、武士の話も多く残ります。「武道伝来記」「貞享四(1687)年刊」巻二の「思ひ入れ吹く女尺八」では、京より蹴鞠の名人、枯木内匠が広島に下ってきたことから展開します。蹴鞠は広島城下の武家方に、あ

つという間に広がります。ここに福岡安清といっ

て取りに行く、その家の息女が居合わせました。七夕の梶の葉の儀式を行うその姿は天女のように美しく、つい見ほれてしまいました。そこで鞠を取ってくれるように頼みますが、姫も好意を持ち、2人の恋の始まりとなります。

2人は心を交わし、逢瀬を重ね、ついには姫のおなかに子を宿すまでの深い仲となります。姫の名は小督。父は勝沢基太夫。藩の組頭として江戸に参勤しており、帰国の際、遠州浜松の縁戚、甚左衛門宅を訪れます。その息子の基平はたくましい19歳。この基平こそを娘の婿にと、広島まで連れ帰ります。

「思ひ入れ吹く女尺八」

小督はいろいろと理由をつけて縁談を拒み続けますが、不愉快に思っていた基平は、ある夜忍んできた村之助を蘭討ちにします。これで2人の密会が世間に露見し、基太夫は謹慎、基平も広島を立ち退きます。

小督も広島を去り、縁を頼り、1人で播州明石の田舎家を借りて、貧しい暮らしを送ります。小督はその家で村之助との子を産み、村丸と名付け、気丈に育て、やがて美しい13歳の立派な若衆に成長します。

いよいよ、長い時間を経た敵討ちとなりますが、次回にて。

(関西学院大文学部文学言語学教授)

引き裂かれた村之助と小督